

2020年12月16日(水)

西間木 公孝 (日本キリスト教団 新得教会 牧師)

「深い淵の底から」

深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。

主よ、この声を聞き取ってください。

嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。

(詩編 130 編 1 - 2 節)

北星学園大学のみなさん、こんにちは。日本キリスト教団新得教会の牧師の西間木公孝と申します。十勝の新得町にある教会で牧師をしているので、みなさんとお会いする機会はありません。今回、新型コロナウイルス感染防止のため、オンラインでのチャペルタイムとなり、みなさんと出会う機会が与えられました。思いもよらない、不思議なめぐりあわせに驚いています。

2020年が始まった当初、2020年がこのような年になろうとは誰も予想していませんでした。みなさんもそれぞれに2020年がこんな年だったらいいなと希望を思い描いていたと思います。中国の武漢でコウモリを起源とする感染症が蔓延して、大騒ぎになったという年末年始のニュースも遠い世界での話だと思っていました。春節の頃には、札幌の街にも中国からの観光客がたくさんいました。さっぽろ雪まつりも暖冬の中、雪不足のため雪像の数が減りましたが、それでも多くの市民、観光客とともに開催されました。だから、感染症のことは、どこか遠い世界で起きている出来事で自分には関係がないことと思っていました。2月の半ば頃、わたしの住む十勝地方のある教会では香港で感染症が蔓延しているので、教会のみなさんにマスクを寄付していただき、香港の教会に送るという活動が行われていました。そんな活動の最中、いたるところで、マスクが無くなり、日本国内でも感染症の感染者が出てきて、北海道でもぽつりぽつりと感染者が見られるようになり、連日、日本国内のニュースとして報道されるようになって、このことはどこか遠い世界での出来事ではないということがわかりました。それからこの間、毎日、何か悪い夢でも見ているのではないかという現実が続いています。

この2、30年で、世界がより小さくなったように感じます。交通機関の発達や情報通信の劇的な発達、物流の急激な進展もありますが、わたしたちは、これまでのように自分たちの地域だけで生きるのではなく、世界中の人たちがそれぞれ関係し、共に生きる世界になったのだと思います。「経済」という言葉の英語「エコノミー」の語源がギリシャ語の「家」という言葉にさかのぼることができるように、世界はひとつの家であり、人も物も情報もそして病気もすべてのものが支え合い、共有しながら生きているのです。にもかかわらず、わたしたちは、自分さえよければということで、これまで生きていたのではないかと思います。その自分中心な生き方の限界が、今回、新型コロナウイルスによって露呈し、わたしたちの罪が明らかにされました。もう一度、「共に生きる」ということを真剣に考えなければならぬと感じています。

詩編 130 編は「深い淵の底から主を呼ぶ」という言葉から始まります。深い淵の底とは、光の届かないところ、希望のないところ、絶望ということです。「主を呼ぶ」というやさしい言葉で表現されていますが、絶望の中にいる人が呼ぶなどという、やさしい行動をするのでしょうか。「呼ぶ」なんかよりも、全身全霊、自分の全存在をかけて「叫ぶ」ということが本当の意味だと思います。聖書には、その時代その時代を生きた人の多くの叫びが記されています。そのいのち叫びの中に希望を見出すのが、聖書の証言ではないかと思います。人は絶望の中で神に出会います。そして絶望の中に希望を見い出します。もうどうにもならない中で、人は自分の欲望や独りよがりな思いを捨てて、神の声を聞き、そのことで立ち上がりました。わたしはこのことを思う時にいつも示される聖書の言葉があります。それは、新約聖書のコリントの信徒への手紙 二 12 章 7 節から 10 節の言葉です。それは、神がパウロに思い上がることのないように、そして痛めつけるために、ひとつのとげが与えられた話です。ひとつのとげとは、サタンから送られた使いだと記されています。それが何を意味するかは正確にはわかりません。パウロはサタンから送られた使いを離れ去らせてほしいと三度主に願いました。三度というのは、三回という回数の意味ではなく、何度ともいう意味です。すると主は「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われたのです。そのことによって、パウロは状況が変わることばかり願っていたことから、一転、キリストの恵みが今自分に十分にあることを知り、自分がキリストによって守られていることを喜びをもって確信したのです。頭でわかったという体験ではなく、腹に落ち、自分の人生を揺るがすような理解でした。人は生きていかなければなりません。生きていく中で、多くの試練に出会います。しかし、その時、その時、わたしたちは悩み、立ち止まり、そして神に尋ね求めます。そして、神の言葉によって力を得て、また立ち上がります。今回の新型コロナウイルスは、コリントの信徒への手紙のパウロの言葉を借りるなら、サタンからわたしたちに送られた使いかもしれません。そう考えると、このことは神からのメッセージです。だから、わたしたちは今、この状況の中で、深い淵の底から主に対して尋ね求め、叫びます。そして、素直な気持ちで神の言葉を聞きます。その時、わたしたちはそこに希望を見い出すでしょう。

お祈りいたします。

いのちの源なる神さま。御名を賛美いたします。

本日はあなたの導きにより、北星学園大学のみなさんと共にあなたの御言葉をわかちあうことができました。こころより感謝いたします。

いつの時代もあなたはわたしたちに語りかけてくださいます。

いま、わたしたちの世界は新型コロナウイルスによって苦難のただ中にあります。

先が見えません。どうしたらいいのか、わかりません。

しかし、あなたは絶望の中に、希望を示し、わたしたちに道を示してくださいます。

わたしたちは、いま、イエス・キリストのご降誕を待つ、待降節の時を歩んでいます。

キリストの降誕によって、神の愛があらわれ、すべての人に救いが訪れますように。

この祈り、わたしたちの救い主、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。